

相克する Joe Christmas と Joanna Burden

沈黙の空間と発火しなかった二発の弾丸

石井 洋子

Conflicting Joe Christmas And Joanna Burden

The Space Of Silence And Two Bullets Not Ignited

ISHII Yoko

The novel is on racial problems and is symbolic of light and the dark. Lena Grove, Joe Christmas, and Gail Hightower are the main characters in *Light in August*, which has been divided into three stories. Joe thinks that he is a Negro. Joe and Joanna had a conflict. They each had a different purpose in life. Joe killed his lover Joanna, and Joe learnt her love for him from two bullets not ignited. Their love shone momentarily. Joe was shot to death by Percy Grimm, touching off anger in the people in the town. Joe loved her in his mind, and died calmly and quietly.

Lena Grove が光の中に存在する象徴的な意図をもち最後まで生き延びることを想定しているのに対して、Joe Christmas は、暗黒の世界を象徴する意図が明らかにある。彼はその社会的に構成された人種差別の中に閉じ込められる。そして牧師 Gail Hightower は、自分自身の精神的なタナトスの世界に閉じこもる。外界に対して常に臆病で、彼の高貴な精神は南北戦争で活躍した祖父の幻を追っている。この三人を主題とする物語はそれぞれ別に発展するが、終局において Hightower を中心にして交差するのである。Richard Chase(1914-1962)の著書 *The American Novel and its Tradition* の中で *Light in August* の登場人物について次のように述べられている。

Except for the Reverend Hightower, one of Faulkner's characters who are ruined by time, no one is particularly aware of time; and the surviving, enduring character, Lena Grove, lives in a timeless realm which seems to be at once eternity and the present moment. ⁽¹⁾

Hightower 牧師を除いて Lena と Joe は時間の意識のない世界に住んでいる。Joe の悲劇に相対する存在として、永遠の象徴は Lena に求められている光であ

る。Lena の光のある存在とその裏面にある Joe の闇黒は余りにも激しいものであると言わねばならない。

Joe は五才でキリスト教カルヴィン主義の熱心な信者である McEachern 家の養子となったが、幼い頃から養父 McEachern に革紐で打たれながら成長した。しかし彼はまるで僧侶になったように、打たれても恍惚状態におちいり死を恐れなかった。孤児 Joe の生きるための懸命な努力は、養父 McEachern に従うことであった。幼い子供に反発することは許されなかった。養父 McEachern に打たれる少年について、次のような描写がある。

Perhaps the boy knew that he already held the strap in his hand. It rose and fell, deliberate, numbered, with deliberate, flat reports. The boy's body might have been wood or stone; a post or a tower upon which the sentient part of him mused like a hermit, contemplative and remote with ecstasy and selfcrucifixion. ⁽²⁾

幼い彼は McEachern 夫人の愛を拒絶していたが、Joe は夫人の愛が欲しくてたまらないのである。しかし Joe はそれを表現することはできない、母親に抱いてもらったこともない母の愛を全く知らない子供である。彼は夫人がためらうように、子供に差し

出す愛の手を拒絶していたのである。夫人の愛を受け入れてしまうと、激しい McEachern の鞭を受けて立つことさえ到底できないことを、彼は知っていたのかも知れない。この家に始めて来た時もそうであった。夫人は Joe のために、足を洗う湯を沸かして待っていた。しかし五才の彼には夫人の気持は分らなかった。次にある夜の出来事を引用して Joe の気持を考察する。

He was just eight then. It was years later that memory knew what he was remembering; years after that night when, an hour later, he rose from the bed and went and knelt in the corner as he had not knelt on the rug, and above the outraged food kneeling, with his hands ate, like a savage, like a dog.⁽³⁾

Joe は普通の子供としての十分な感覚を持った少年であるが、母親の愛がそそがれる立場になかった子供である。彼のために夫人が作った夕食を、夫人の前でお盆ごと引っくり返した。そして一人になってから、まるで野蛮人が、それとも犬のように散乱している食べ物を拾ってむさぼり食べた。このような行動をとれば、どうゆう結果になるかは彼自身分っていないのである。夫人の愛を拒絶するということは、その延長にあるものは、死にいたることであると言えるだろう。少年が悪魔のような McEachern の手に持たれた革帯で打たれて恍惚状態に至るのは、少年の大人への憧憬として、男性中心の社会構造の中に存在する生への執着である。言い換えれば、McEachern のようになりたいという願望が根底にひそんでいる。それが揺らぐことなく、恍惚の域にまで到達してゆくと思われる。しかし McEachern 夫人は、その細い身体で夫の威圧に耐えながら、少年に愛の風を送り続けているのであった。幼い Joe を鞭で打つ McEachern の手の描写が、如何に激しいものであるかを表現している。その状態を「静止画像」として見る時、ランプの炎に照らし出されているその男の手は、まるで血に浸されたばかりのように赤く浮かび上がった。その背景に八才のまだ幼い少年である Joe がベッドに横たわっている。この一瞬の出来事が言葉として言わなくとも、その様子は何かを物語として表現している。やがてその経過を理解

した少年は恐ろしいという気持などもたず、この情景を心に刻んだだけで、力が抜けてぼんやりとあおむけになって、石像のようにベッドで寝ていたのである。

Joe はこうした肉体的な苦しみを味わい自分の中に閉じこもる傾向を示しながら、受けなければならぬ外界の出来事を、子供として受け取っていたのである。それは、やはり大人の世界に対する憧憬が彼の幼い心を支えていたと考えられる。しかし Joe の幼年時代において彼に最も深く打撃的な印象を与え、女性嫌いの性格を作りあげたのは、栄養士の情事を目撃した幼い子供の感覚であった。秘密を口外させまいとして栄養士が幼い Joe に一ドル銀貨を与えた時の彼の気持を『『八月の光』の作者のふるまい』において平石貴樹は次のように述べている。「銀貨の価値も分らず、今までそれを見たこともないが、光っていてきれなので欲しいと思った、というジョーの子供らしいという反応がここではまず描かれる。それを最終的に遠慮しなければならないのなら、「内心では欲しかったけれど、栄養士の目つきが異常だったので怖気づいた」などと、凡庸な作家なら書いていただろう。ところがフォークナーはすぐに続けて、ジョーは「もしそれがかれのものだったら、彼女にあげたりはしないだろう」と書く。これも子供らしい感想であるが、自分が他人にあげないのだから、他人から与えられることも期待しない、というかれの判断の前提には、子供なりにぼんやりと、甘えることを知らぬ刹伐とした独立心が見て取れ、ジョーが長じてそうなような孤独な人間像の雛型がさりげなく刻印されていることが分る。ここで、生涯不変のジョーの孤独や独立心を、かれのフラットな特質と呼ぶことは可能だろう。」⁽⁴⁾ この栄養士との係わりが Joe の生涯孤独な性格を形成する要因にもなり、また彼女が叫んだ「チビの黒ん坊小僧ったら」⁽⁵⁾ という言葉の記憶が、彼を黒人として生涯認識させてゆくことになるのである。そして成人した彼は、初恋の女性である Miss Bobbie Allen の世界へとめり込んでゆくが、彼女にも黒人であることを罵られる。そして養父 McEachern を打倒するが、Bobbie のことから Max 一味に殴られて、十五年という長い日を、果てしなく渴いた道路の上に過ごすこ

となる。それは孤独な猫のように、空ろな当てのない旅であった。

彼は長い放浪生活の果てに、この大きな Burden 屋敷と言われている、四角い建物の近くに来ていた。彼はその家の住人について、近くに住んでいる子供達に聞いた。すると子供達は、黒人の世話をする一人暮らしの女性ミスタ・バーデンのことを彼に言った。彼はある目的をもって Burden 屋敷の前の茂みに身を横たえた。明るい日差しが全く遮断された、大地の少し湿った感触は、彼に安らいだ気持を与えていた。‘impenetrable’ という伺い知れない世界を感じながら、彼は夜の扉の落ちてゆくのを待った。Joe の行動について次のような叙述がある。

Then he climbed into the window; he seemed to flow into the dark kitchen: a shadow returning without a sound and without loco-motion to the all mother of obscurity and darkness.⁽⁶⁾

彼はその屋敷の窓から侵入した。それは母なる大地の豊穡な香りをもった「子宮回帰」であった。養父 McEachern の革紐で打たれた夜、彼は驚くなって大空を飛びたいと願った。しかし彼が飛ぶ大空でさえ、すでに網が張られているということを彼は知らないのである。Joe が窓から侵入して、その家の台所で皿を手にして食べているところへ、この家の主人である女性が入ってきた。彼女は緊張している Joe を見ても、あわてる様子はなかった。とても冷たくそして落ち着いていた。全く侵入してきた人物に遭遇しているようではなかった。Joe は皿を持ちながら、そして彼女は蠟燭をもって、互いにしばらく見詰め合っていたのである。彼はこの独身女性のベッドで恋人になった。しかし二人の関係は奇妙なところがあった。Joe の無軌道ぶりは、平凡な悪党がするようなものであったが、Joanna Burden の性格は全く別な二つの面をもっていた。その一つは女性として十分な感覚をもった女であった。しかしもう一方の面は、あたかも一人の男性であるかのように仕事に対するのである。Joe には理解できなかった。彼は彼女に与えられた小屋で何もすることなくタバコをふかして過ごしていたのである。それは次のように述べられている。

Most of that day he spent lying on his back on the cot which she had loaned him, in the cabin which she had given him to live in, smoking, his hands beneath his head. ‘My God,’ he thought, ‘it was like I was the woman and she was the man.’⁽⁷⁾

彼は‘俺が女で彼女がまるで男のようだと思った。’しかし Joanna の家族は、祖父の Calvin Burden や父の Nathaniel Burden が解放された黒人たちを助ける仕事を政府から貰って、北部から Jefferson の町へきたのであった。祖父や兄は、黒人問題で南部軍人に射殺された。彼女は Jefferson の町で、黒人を助ける仕事をしている有能な女性であった。言い換えれば仕事一筋に生きてきた‘career woman’であった。だが彼はある日 Joanna が、彼を黒人として扱っていることに気づいた。二人の関係には次のような叙述がある。

‘At least I have made a woman of her at last,’ he thought. ‘Now she hates me. I have taught her that, at least.’⁽⁸⁾

Joe は男などまるで関係なかった Joanna に性のあり方を教えた。これは彼にとっては、憎みを教えたという結果になった。‘だから俺を憎んでくれ’と思うようになったが、しかし彼の手の下にある Joanna の身体は、死体を思わせるような固い肉体であり、女性らしい柔らかさなど微塵もない、その硬さは例えようもないものであった。まるで女性とは思えない、しかし彼女の外見は、年令よりずっと若いのである。その彼女が、全く違った人物になってしまったように、性への恍惚状態に落ちてゆくのである。その恍惚状態も底が見えない溺れ方であった。しかしこれをあたかも墮落であるという表現は、Joanna が Joe を‘negro’として扱ったことによると思う。二人の関係が長く続いたことは、Joe の意識に憎しみの感情が常に存在していた結果であると思われるが、その根底にひそんでいたと思われるのは、知らないことに対する魅力が多分にあったと考察できる。

Joe の女性に対する混沌とした意識について Faulkner は‘impenetrable’⁽⁹⁾ という伺い知れない他者として表現しているが、更に最も有名な合成語と

して Faulkner は次の言葉を述べている。
 ‘fecundmellow ‘と’womanshenegro’である。これらの
 単語の持っている独特の意味は、Joe が根底に秘め
 ている感触を想像させるし、また彼の感覚が如何に
 豊かであったかを想像させているのである。しかし、
 彼の意識は、外界に対して心を閉ざしてしまってい
 る。彼は自分が黒人であると意識しながら、また女
 性や黒人を他者として意識しているのである。その
 矛盾の中に存在するのが Joe であるだろう。その上
 彼の心は孤立している、外界の出来事には反応しな
 い、そのような Joe に対して、Joanna は通常的なこ
 とには関心がなく、Joe の立場を理解するというこ
 とは全くない。彼女もまた自分の立場からだけしか
 考えられない自己中心的な仕事一筋の女性である。
 お互いに頑固な自分の殻の中にしか生きることがで
 きないのである。そして深い愛の恍惚の期間を過
 ぎ’she was pregnant’⁽¹⁰⁾ というこのような事実が彼
 女をさらに強固な女にさせて行った。Joanna は、Joe
 を ‘negro’ として大学で教育を受けさせ、弁護士
 の資格を持たせて、彼女が社会的にしている仕事を
 Joe に全く任せたいというのであった。彼女は Joe
 を黒人として社会に立たせたい、という現実に即した
 行動力のある女性である。一方 Joe は現実からの逃
 避を繰り返し、舗装された道路の上を猫のように放
 浪の旅を続けてきたのは、‘negro’ として生きるこ
 とを否定していたのである。彼が最も安心して生
 活できるところであるだろうと思ったところは、最
 も彼の自尊心を損なうところと変わった。彼は Joanna
 を狂気であると思った。しかし彼は、自分からこの
 屋敷を出で行けば、何時でもまた自由な自分の立
 場になると信じていた。ある日の夕方 Joanna から
 の手紙が、小屋のベッドの上にあった。彼はその一
 枚の紙によって鎖で繋がれたように支配されて行
 くのである。その内容は Joanna からの ‘来て欲
 しい’ という依頼の書状であった。彼は何度もそ
 うにして母屋の彼女の部屋に行くのであった。二
 人は互いの主張を曲げることはなかったが Joe の
 方が力は強かった。彼の自己表現は、力によるこ
 とが主であり、老いが感じられる Joanna を何回
 も打ったのである。しかし女には戦いのルールな
 ど全くない。Joanna の高い姿勢は、ますます鋼鉄
 のようになってゆくのであ

った。彼女はキリスト教に深く精通していた。また
 彼女は時折 Joe に共に祈ることをうながしていた
 のである。次の叙述は Joe に祈りを強要する彼女
 の姿勢の描写である。

She did not stir; her voice did not cease. Her head was
 not bowed. Her face was lifted, almost with pride, her
 attitude of formal abjectness a part of the pride, her voice
 calm and tranquil and ab-negant in the twilight...Then
 she turned her head. “Kneel with me,” she said.

“No” he said.

“Kneel,” she said. “You wont even need to speak to
 him yourself.

Just kneel. Just make the first move.”

“No,” he said. “I’m going.”⁽¹¹⁾

Joanna は強固な姿勢で 彼に祈ることを強要するが、
 彼は従わなかった。ある時彼はナイフを忍ばせて彼
 女の部屋に向かった。彼女の部屋に近づくと祈りの
 言葉が微かに聞こえてくるようであった。夕暮れ近
 い彼女の部屋は全く静かであった。その夜も祈るこ
 とから始まった。彼は女がかまえた銃口が壁に影を
 落としているのを見ていた。だがそれはカチリと音
 がただけであった。Joanna が旧式の銃口を Joe に
 向けて発射した、しかし銃は不発であった。その直
 後に Joe は殺人をしたと考えられる。その時仮に、
 Joe に ‘consciousness’ があったとすれば、第六章の冒
 頭で述べられている内的独白また意識の流れが認識
 力よりも先に克明に叙述されている筈である。第六
 章の冒頭に次のような叙述がある。

Memory believes before knowing remembers.
 Believes longer than recollects, longer than knowing
 even wonders.⁽¹²⁾

しかし Joe の ‘consciousness’ は全く空白状態で、そ
 の部分は欠落している。Joe がその後にしたか
 については、何も記述がないのである。彼の意識が
 記述されるのは、Joe が逃走を始めてからである。
 近隣に住む農夫が、女の死体を運ぶのに苦労したと
 いう叙述がある。その叙述を引用して考察する。

“She was lying on the floor. Her head had been cut
 pretty near off; a lady with the beginning of gray hair.
 The man said how he stood there and he could hear the

fire and there was smoke in the room itself now, ...And how he was afraid to try to pick her up and carry her out because her head might come clean off...”⁽¹³⁾

暗い夜道を一人で逃走を始める前に、気がついてみると Joe は自分の右手に旧式の重い拳銃を握っていた。彼はどうしてこの拳銃をもっているのか思い出すことができないのであった。さっきこの右手を上げて車を止めて、若い男の車に乗せてもらった。車の中には若い女が同乗していたが、その女性は恐怖で硬直していたのを Joe は気がつかなかった。彼はしばらく行ってから車を止めさせた。それは人家のない闇であつた、そして車外に放り出された。走り去る車から甲高い女性の悲鳴が漂ってきた。彼はその時始めて自分の右手に旧式の拳銃を握っていることを感じたのである。そして彼はその拳銃を捨てようとしたが、思い直してマッチをすり拳銃の中を調べた。マッチの細い光の中に、二つの弾丸入りの薬室が浮かんできた。一つは撃鉄が落ちていたけれど不発であり、もう一つは撃鉄が落ちずに終わっていた。Joe は Joanna が自分を撃ち、そして Joe も撃つ気であったことを知った。その時の描写を次に挙げて考察する。

‘For her and for me, he said. His arm came back, and threw. He heard the pistol crash once through undergrowth. Then there was no sound again. ‘For her and for me.’⁽¹⁴⁾

Joe が殺人をしてから人間的な感情にとらえられたとすれば ‘自分と俺を討つつもりだったんだ’ という ‘For her and for me,’ ‘を二回繰り返して言ったことは 彼の驚きの真骨頂と受け取れる。そして更に、 ‘彼女は死ぬつもりだった’ という言葉は、彼に強く Joanna の気持を意識させたと思われるのである。ここにおいて Joe は彼女の強さの裏面にあった Joanna の立場としての愛を感じたと思われる。

Joe の Joanna に対する憎しみは深かったが、それ以上に、憎んでくれと願った Joanna への愛は彼が意識する以上に彼の心を占めていた。発火しなかった二発の弾丸を見つけるまでの Joe の沈黙の空白は、Joe の ‘unconsciousness’ の状態を如実に示している。

Joanna は強い姿勢の中に明らかに殺意を持って Joe に対した。しかし Joe に殺意はなかったと思われる。黒人であるという差別の社会構造に翻弄されなければならなかった Joe の生涯で、Joanna への気持は、彼を支える愛となっていた。しかし事件の前後を考慮すると、彼は二発の弾丸の意味を知った時点で ‘unconsciousness’ の状態から ‘consciousness’ の状態に戻ったと思われる。

Doc Hines 夫人に言われたように、Joe は手錠をつけたまま Gail Hightower の家まで逃亡した。Jefferson の町の人々は、黒人が白人女性を殺したという報道に次第に関心をもち始めた。Joe の祖父母の存在が判明し、実は Joe は黒人ではなかったという新事実が浮上してくるが、しかし Joe 逮捕は、町を挙げて急速にわき立った。Joe の逮捕の裏面にある町の人々が中心である第三者としての語りがあるが、その町の人々の言葉は、潜在していた差別の嵐を Jefferson の町に引き起こして行った。州の自衛軍の隊長 Percy Grimm が自転車で Joe を追跡した。Richard Chase の著書 *The American Novel and its Tradition* の中で Joe の悲劇について、次のような叙述がある。

It is the custom of some traditionalist critics to say, in the words of one of them, that “sentimentalists and sociologists are bound to regard Christmas solely as a victim, “ whereas actually he is a tragic figure akin to Oedipus. But the main difference between Joe Christmas and Oedipus (or any other tragic hero in the full classic sense) is that Christmas really *is* a victim; he never has a chance, and a chance, or at least the illusion of a chance, a tragic hero must have.⁽¹⁵⁾

オディプス王よりも更に悲劇である Joe は、人生において誰もがもっているであろう筈の機会が与えられなかった。そして機会を幻想することもできなかった。あらゆる機会は全て閉ざされていた。約束された未来はなかった。大空を飛ぶことも不可能であった。古典的な悲劇の主人公でさえ、自由を想像する幻影はもっていたのである。彼が飛翔する大空もすでに網が張られていたのである。Joe は大空の網から逃げるために走らなければならなかった。その世界から逃亡しなければならなかった。同じ

Mississippi の空の下をのんびりと行く田舎バスが存在している。それは穏やかな田舎の風景で一枚の絵画のようである。そのバスのように、動かないのんびりした二人の人物の描写を挙げて、Joe の不幸と対照的な光の部分の記述を挙げて考察する。Richard Chase は、彼の著書 *The American Novel and its Tradition* の中で *Light in August* について Mississippi の田舎ののんびりした太陽の輝きについて次のように述べている。

The Mississippi landscape spreads out before us and the faculty of vision becomes very important as we are shown, the town of jeffer-son, the houses of Hightower and Miss Burden, or the smoke on the horizon as Miss Burden's house burns. There is much use of the painter's art (even the sculptor's, as when Faulkner makes a wagon slowly passing through the countryside look like part of a frieze, or a seated person Lena Grove or Hightower resemble a statue).⁽¹⁶⁾

Mississippi 州の田園地帯に行く田舎バスの背景には、遠い地平線上に煙が上がっている。それは Miss Burden 屋敷の火災の煙であった。その牧歌的な風景は、芸術として評価されるだろう。しかしその中に描かれる二人の彫刻のような人物がいる。一人は像のような Lena である。彼女は明るい八月の光があり、永遠の光の象徴として描かれているのである。しかし同じ像のような Hightower は祖父の幻影に魅せられて、祖父が馬上で疾駆する夕闇の窓辺にじっと座ったままにしている。しかし彼の苦しみは自らの精神的なタナトスの世界である。その二人の人物に対する Joe の苦しみは、人種差別と言う社会的な苦痛の連続で、その闇黒は底が見えないのである。Joe は Hightower の家に逃げこんだ。そして Hightower の証言で Joe のアリバイは Grimm に伝えられた。その Joe のアリバイとは、事件の当日の彼は Hightower といっしょにここにいたという証言であった。その証言は Doc Hines 夫人が、孫の Joe を弁護するために、Hightower 牧師に願ったにせのアリバイであった。しかし Grimm は台所で Joe を射殺した。Grimm はどうしても止めることができない激情に襲われて、自らの行動を抑制することはできなかった。周りにいた人々もその光景の凄まじさに圧倒されてよろめ

いた、そして誰もが気持を悪くして嘔吐したのである。それは次のように叙述されている。

Then Grimm too sprang back, flinging behind him the bloody butcher knife. "Now you'll let white women alone, even in hell," he said. But the man on the floor had not moved.⁽¹⁷⁾

Joe は五発の銃弾を撃ちこまれた。‘consciousness’ はあったが朦朧としていた。死の恐怖に襲われているようではなかった。全てを超越しているような、肉体の痛みを感じさせないものであった。彼の心は平和で穏やかなものがあった。それは Joanna を通して再生へと向かう愛が存在していたのである。瀕死の中での Joe の意識は平和であった。その時の状況は次のように述べられている。

He just lay there, with his eyes open and empty of everything save consciousness, and with something, a shadow, about his mouth. For a long moment he looked up at them with peaceful and un-fathomable and unbearable eyes. Then his face, body, all, seemed to collapse, to fall in upon itself, and from out the slashed garments about his hips and loins the pent black blood seemed to rush like a released breath.⁽¹⁸⁾

終局に至っての Joe の平和な世界は、彼自身が通常の人間的な欲望から解放されていたからである。Joe と Joanna の関係について白石貴樹論文「『八月の光』作者のふるまい」において次のように述べられている。「(ジョーとジョアナの関係がこれほど長引いたのは、そこにおいて愛がたくまずして憎しみの形を取り得たからである。)」⁽¹⁹⁾ 二人の愛が、憎しみの感情をもちながら歩んできたということは、二人が激突する場面でも明らかである。しかし Joanna の ‘career woman’ としての実力は一貫して強固であった。それはどんな境遇になってもびくともしない強固なものであった。彼女は祖父からの社会に対する信念があったと考えられる。

Joe は彼女を狂気であると思ったが、その関係から去ることはできなかった。彼はこの関係から去ろうと思いつつ、ますます深い愛の世界へと突入してゆくことになる。彼は逃げることは不可能である自分を感じていたのであろう。Joanna の強い姿勢は、

彼女なりの社会に対する当然の姿勢であった。Joanna のように社会的に仕事をもった強い立場の女性に対して、社会的には自立していない立場の弱い男の存在は、Faulkner が描いた他の物語においてもしばしば見られる。Lena Grove と Byron Bunch の関係もそのような形式の例であるだろう。Lena の明るい太陽の象徴として、何時も Byron が影のように彼女を支えている。また *A Rose For Emily* は、William Faulkner の短編であるが、女主人の Miss Emily Grierson と Homer Barron の関係も同じようなものが表現されている。Miss Emily が所有する広大な屋敷の中で、北部からやって来た Homer Barron の姿は永遠の死の床についているが、Emily の死後町の人々によって発見される。Emily は彼を殺害していた。だが、そこに残っていたものは Emily の Homer Barron に対する永遠の愛であった。その愛を証明するであろうと思われる灰色の Emily の髪が、くぼんだ枕に残されていたということは、町の人々をぞっとさせたにちがいない。

大江健三郎(1935)の『小説の経験』に次のように述べられている。「さてフォークナー世界の男女の相関関係にはもうひとつの特筆があります。こうした情熱のかたまりのような神話的女性と男たちがつきあわせて書かれてゆくうちに、いわば単純かつ無邪気なだけの人物だった男性が、しだいにかれ独自の豊かな個性をあらわしはじめるということです。」⁽²⁰⁾ Joe と Joanna の場合も彼女が、大江の言うような神話的存在ではないだろう。しかし彼女の仕事一筋の男性的な一面は強固で、犯し難いものがある。その強さの表現は、古い拳銃を突然彼に突きつける、彼女の独特な一面である。

Joe はその逃亡の途中で自分の手に持っていた拳銃の中に二発の不発の弾丸を見て、そこで始めて彼女が弾丸を二発入れた意味を悟るのである。一つは彼女が自分自身を撃つものであることを知った。それからの Joe の行動は、彼独自の世界を構築し始めている。それは今までお互いに相克していた Joanna を、彼自身の内面の存在として認識できたからである。

彼は Joanna とともに存在していた、そして彼の生命が終わる時、Joanna も共に永遠に消滅してゆくの

である。彼は肉体の苦しさも痛みも感じられない境地にいたにちがいない。発火しなかった二発の弾丸の意味が理解できた彼は、この時から生命の続く限り、Joanna とともに行動していたのではないか。Hightower 牧師の家の台所で、銃弾を浴びた Joe の痛ましい姿の描写は、彼が受けなければならない悲劇であった。

Joe を中心とする円を構成する物語は、一瞬輝いた Joe と Joanna の愛の光を包含し、比類のない悲劇は、その光と影を人々の心に永遠の課題として与えながら闇黒の世界へと消えていった。光と相対する闇黒の中に見る人種差別の悲劇 その悲劇を通して Joe は Joanna とのすれ違った愛を、発火されなかった二発の弾丸の中に見つけた。そして彼は、空白の時間の中から再生へと向かって行くのである。そこには 'peaceful' な世界が開かれていたのである。

< notes >

Text : William Faulkner *Light in August*, Vintage Books A Division of Random House, Inc. New York 1990.

(付記)

(この論文は、2000 年 10 月 21 日日本大学英文学会で口頭発表した「相克する Joe Christmas と Joanna Burden 発火しなかった二発の弾丸」と題した原稿に加筆・訂正を施したものである。)

注

- 1) Richard Chase *The American Novel and Tradition*, The Johns Hopkins Press, Ltd. London 1980. p.210.
- 2) William Faulkner *Light in August*, Vintage Books A Division of Random House, Inc. New York 1990. p.159-160.
- 3) *Ibid.*, p.155.
- 4) 石貴樹論文「『八月の光』の作者のふるまい」『英語青年』第 145 号第 7 号 研究社.1999. p.466.
- 5) フォークナー著 加島祥造訳『八月の光』新潮文庫、1995. p.131.
- 6) William Faulkner *Light in August*, Vintage Books A Division of Random House, Inc. New York 1990. p.229-230.
- 7) *Ibid.*, p.235.
- 8) *Ibid.*, p.236.
- 9) *Ibid.*, p.228.
- 10) *Ibid.*, p.265.
- 11) *Ibid.*, p.280.
- 12) *Ibid.*, p.119.

- 13) *Ibid.*, p.91.
- 14) *Ibid.*, p.286.
- 15) Richard Chase *The American Novel and Tradition*, The Johns Hopkins Press, Ltd. London 1980. p.213.
- 16) *Ibid.*, p p.210-211.
- 17) William Faulkner *Light in August*, Vintage Books A Division of Random House, Inc. New York 1990. p.464.
- 18) *Ibid.*, p p.464-465.
- 19) 平石貴樹論文「『八月の光』の作者のふるまい」『英語青年』第145号第9号 研究社、1999. p.586.
- 20) 大江健三郎著『小説の経験』朝日文芸文庫、1998. p.71.